

第3章 トータルデザイン 全区間の基本的な枠組み

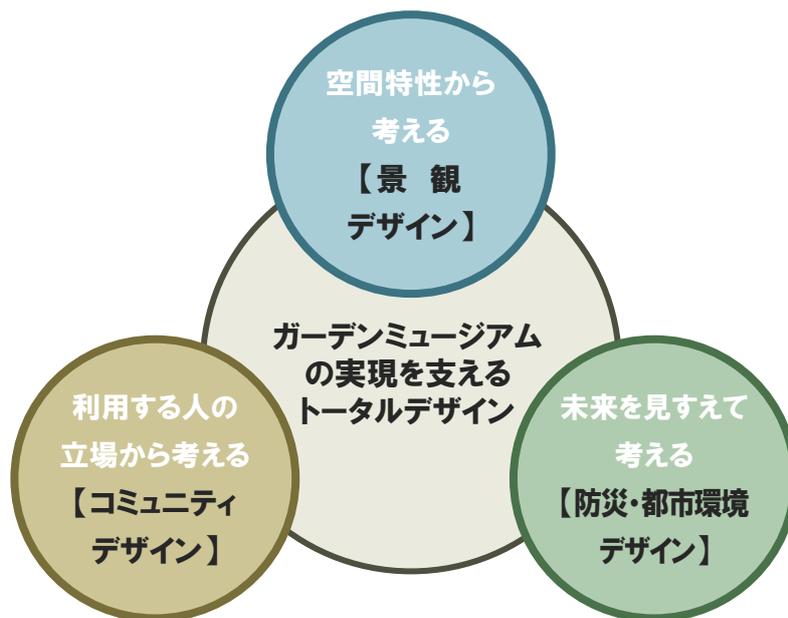
3.1 トータルデザインとは

広大で長い時間をかけて創り上げていくガーデンミュージアム*は、すべての施設、仕組み、活動において、高い質を備えた空間づくり、仕組みづくりのために統一感、整合性のとれたデザインを目指す必要があります。このような取り組みを進めることで「これまでにない先進的で魅力的なガーデン*空間」が、行政のみではなく市民や専門家の手で実現されると共に、ガーデンミュージアムに対する市民の誇りと愛着も高まります。

このような総合的なデザイン手法を「トータルデザイン*」と位置づけ、「景観デザイン」、「コミュニティデザイン*」、「防災・都市環境デザイン」という3つの要素から基本的な枠組みを掲げることとします。

3.2 トータルデザインの構成

トータルデザインの3要素である「景観デザイン」、「コミュニティデザイン」、「防災・都市環境デザイン」が支えあって持続可能な空間として実現されます。



●●●空間特性から考える 景観デザイン●●●

草津川跡地は琵琶湖から市街地をつなぐ貴重な緑の財産と言えます。

草津駅周辺や商店街、草津宿本陣などの歴史的資産に囲まれた市街地にある草津川跡地においては、普段の喧騒から離れ、リフレッシュするための憩いのオアシスと呼ぶにふさわしい空間特性を有しています。また、琵琶湖に近づくにつれ、身近に農園活動や生き物と触れ合うような自然観察・体験など、余暇活動を楽しめる空間特性を有しています。

さらには、江戸時代中頃からと言われる長い年月をかけて培われた天井川*の持つ独特の地形、歴史にも、過去と現在、そして未来をつなぐ時空の空間特性を有しています。

草津川跡地は、草津市の都市構造、都市の個性や魅力を構築しうる存在であり、それらを今後末永く引き継いでいけるよう表現する必要があります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

●●● 利用する人の立場から考える コミュニティデザイン* ●●●

草津川跡地ではその歴史の変遷と共に、市民の生活や活動が営まれてきました。また、草津川跡地利用を視野に入れつつ、全市的な「コミュニティガーデン*」への取り組みが始まっています。

ハード面の完成度を高めるためにも、末永くより良い姿に成長させていくためにも、事業化に向けての人と人のつながりや支え合いの関係を深めつつ、参加と協働のまちづくりとしての展開が望まれます。

草津川跡地は、多様な主体の参加のもとに市民と行政との連携を図り、周辺地域の価値向上に寄与するものです。この実現には末永く引き継ぐための仕組みづくりが重要です。

●●● 未来を見すえて考える 防災・都市環境デザイン ●●●

先の東日本大震災では、死者、行方不明者が2万人近くに達するなど戦後最悪の自然災害となりました。自然の摂理への柔軟な対応と共に、オープンスペース*の確保やコミュニティ活動を促す環境整備など「減災*」の考え方を取り入れたまちづくりへの転換が求められます。

また、未来の子供たちにかげがえのない地球環境を残すためにも、低炭素社会*実現に向け、環境に配慮したまちづくりへ向かう必要があります。

草津川跡地は、災害に強い安全・安心なまちづくりと低炭素社会に寄与するふさわしい空間であり、それらを今後末永く引き継いでいけるよう表現する必要があります。

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.3 景観デザイン

(1) 景観デザインのコンセプト

景観デザインでは、「まちに架かるみどり」を実際の空間で展開する上でのコンセプトを設定します。

天井川*と街道の新しい空間化を「歴史性の継承」として目指すと共に、草木との一体感、生物多様性*に配慮した「自然との共生」空間づくりを行います。さらに、親しみやすさや人間を中心に考えデザインされた空間づくりを「人間性の尊重」としてデザインコンセプトに設定します。

歴史性の継承

- 天井川、堤体、街道といった固有の空間特性を意識し、新しい空間化につなげます。
- 草津市のアイデンティティ*である天井川と街道の歴史を活かした景観を演出します。
- 市民の日常生活ルートでもある堤体や草津川マンポ*の歴史性を活かした景観づくりを行います。



自然との共生

- 未来に向け「自然と共に生きる」ライフスタイル*を目指し、自然環境、草木との一体感などを基本とします。
- 市街地から琵琶湖までの緑の連続性と、各区間の個性を活かしたガーデン*により四季折々のグラデーション*を形成します。
- 草木と共に歩行者道への庭園灯やフットライト*などの光の演出により、明るすぎず、安全で柔らかな連続性のある夜間景観を形成します。



人間性の尊重

- ヒューマンスケール*、親しみやすさ、ユニバーサルデザイン*といった要素を重視します。
- 身近に水や緑にふれられる空間づくりを通し、心安らぐ憩いの空間を演出します。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(2) 景観デザインを具現化するための工夫

様々な形で、みどりの立体感、連続性を作る工夫を行い、「まちに架かるみどり」を生み出します。デザインコンセプトから導き出されるみどりを作る工夫を示します。

■歴史性の継承……地形を活かす（堤体の高さを活かした外構、植栽など）



↑法面を活かした立体感のあるみどり



↑ハイラインパークの歴史性とモダンなデザインの融合



↑高低差を活かした眺望点の整備

■自然との共生……水辺や草花など自然の小さな変化を楽しむ。



↑草花や水辺による、景色の変化を演出



↑自然と一体のテラス
←自然と調和した橋



↑階段脇の小さなみどり

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

■人間性の尊重……人と人の交流、楽しい仕掛け。鳥や昆虫など生き物を育むみどり。



←草花に囲まれた
休憩スペース



↑みんなで草花や低木を植える



←身近にできる
自然観察

↓ビオトープ池



■ナチュラルガーデン*手法の基本要素

デザインパターン

人工的な幾何学的線形・造形はできるだけ避け、自然界をモチーフ（手本）とします。

デザインの品質

「高感度」「奥行き・深み」といったキーワードを意識し、クオリティ（質）の高い空間構成を目指します。



草花による柔らかな境界の演出↑

素材

原則として木、石、土など自然素材（陶製、鉄製なども含む）を基本とします。

素材の自然な形状を
活かしたベンチ→



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(3) ガーデンミュージアムの構成要素

周辺市街地の連携・連続性にも配慮しながら、「ガーデンミュージアム*」をまちなかと琵琶湖をつなぐ、全国に類を見ない草津市ならではのオンリーワンの魅力空間として創出します。様々なガーデン*を各区間に展開すると共に、ゆるやかに変化させながら新たなガーデンにつながるようにガーデンミュージアムを形成します。



エコ・ファームガーデン

周辺の農空間と連携し、環境にやさしい農業をテーマにしたガーデンを形づくりします。
新鮮な食材提供など、マルシェガーデンとも連携します。



マルシェガーデン

地場産の品をあつかう市場、カフェ、レストランなど、集客機能を備えたにぎわい空間の核とします。

ナチュラルガーデン

ありのままの自然の花や木の姿を活かし、植物の生きる力が伝わる、安らぎや癒しを基調としたガーデニング手法により組み立てます。

環境共生をテーマに、雑木林や水辺で自然と遊び・学ぶ空間を創ります。

健康づくり、子育てや遊びなど市民の憩いの場となる空間を創ります。

バイオガーデン

エコ・ウェルネスガーデン



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.4 コミュニティデザイン

(1) コミュニティデザインとは

いかに質の高い空間を整備しても、それが使われなくては意味がありません。市民が「ガーデンミュージアム」という空間に愛着を持ち、永く利用され続けるためには、利用する市民がつくる側にも立って、計画策定の段階から参加し、共に空間を育てていくことが重要です。そして、人と人とのつながりの輪、活動の幅が広がれば、さらに様々な形で発展・深化していくことが期待されます。

そのような空間づくりを進めるためには、まずは市民参加のためのコミュニティ形成の場や土台づくりが大切であることから、空間を様々なかたちで共に考え、行動する熱心な担い手を発掘していきます。そこから人のネットワークをたどってコミュニティづくりを促していきます。

このように、市民をはじめとした様々な活動主体のコミュニティづくりを促すことにより、施設の整備だけでなく、計画策定などの過程や整備後の管理・運営、利用を含めた、総合的な空間づくりに主体的に関わっていただき、継続的に「ガーデンミュージアム」が利用される仕組みをつくることを、コミュニティデザインとします。

(2) コミュニティデザインのコンセプト

コミュニティデザインを進めるには、計画段階からの「公共空間づくりへの市民参加」が必要であり、そのための様々な市民参加手法の導入を行います。また、市民参加のプログラムの構築や活動の場づくりなど「市民が主役となる行動計画」を進めることで市民活動の輪を広げます。さらに、これらの市民活動の取り組みを支える仕組みや役割分担などを「市民と行政の協働による仕組み」として取り組みます。

公共空間づくりへの市民参加

- 計画の企画段階から市民が加わって、市民が共に学び、考え、つながりを強める場づくりを行います。
- 市民シンポジウム*やワークショップ*などを通じて、ガーデンミュージアム*の活動の担い手の発掘やネットワークづくりを行います。



市民が主役となる行動計画

- 宿場まつりなどに加えて、音楽、絵画、写真など、市民の創作、交流の場を展開します。
- 自然環境学習、防災訓練、美化活動など、市民の自発的な活動を育む場を展開します。



市民と行政の協働による仕組み

- 市民、事業者、行政など、多様な主体が連携するエリアマネジメント*の仕組みを導入します。
- 行政は、市民と協働で行動することや、市民による持続的な活動を支えるための環境づくりを進めます。

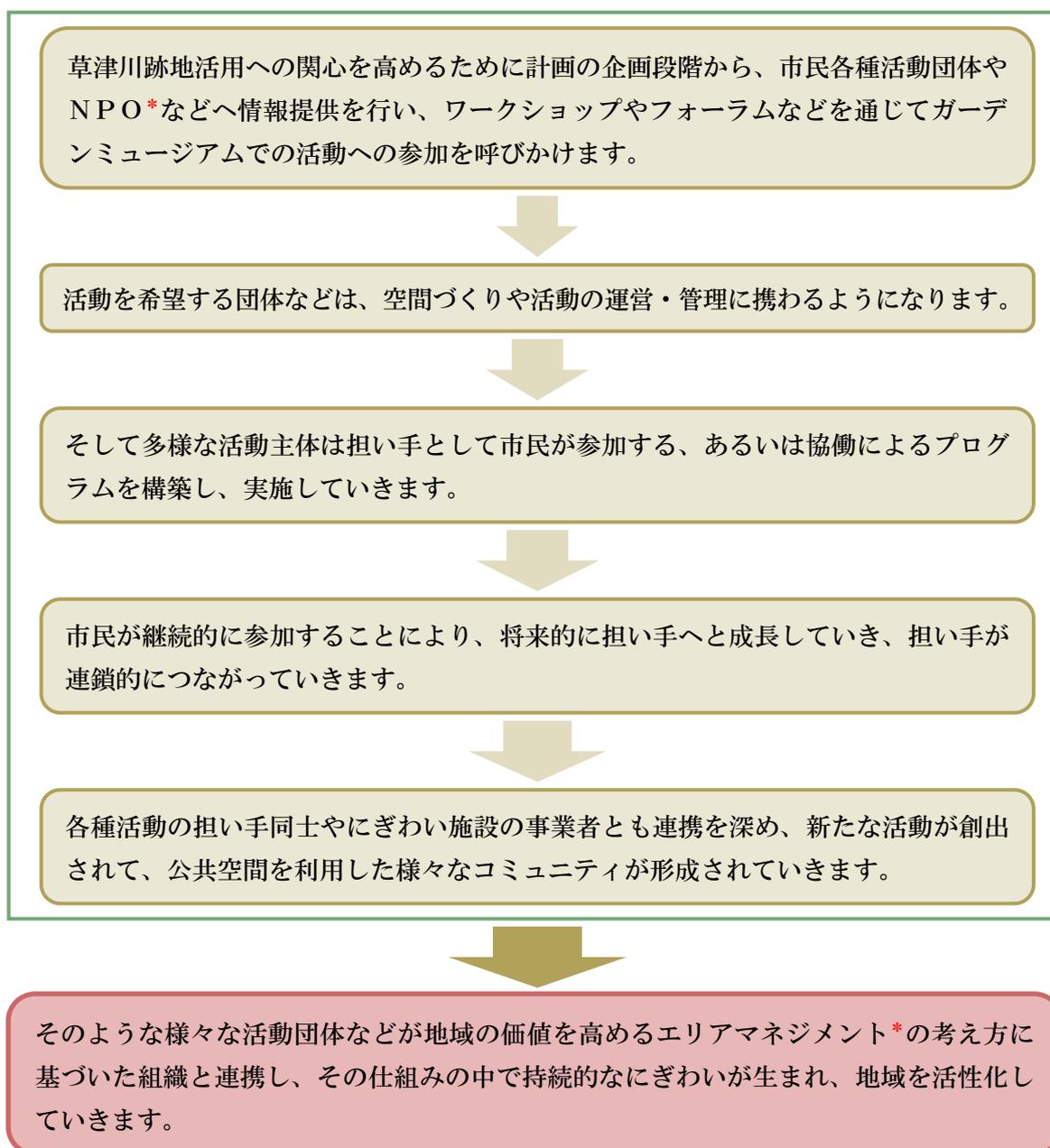


注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(3) コミュニティデザインの取り組み(草津川跡地でのコミュニティデザインの考え方)

コミュニティデザイン*は、市民がガーデンミュージアム*への理解を深め、関心を高められるような取り組みから始まります。それは、公共空間づくりへの市民参加の形ではじめられ、ワークショップ*やフォーラム*などの様々な仕掛けで市民の皆様と共に育んでいきます。草津市では、ガーデニング*を市域全体に広げる「ガーデン*シティ」を目指し、平成24年度から「ガーデニング推進事業」を実施し、市民の皆様を対象にガーデニング講座を開催しコミュニティガーデン*の実践に取り組んでいます。

このような活動を通じて、公共空間に関わる新たな持続可能な力が生み出され、さらなるコミュニティの醸成や地域の活性化につながることを期待されます。



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(4) 草津川跡地のエリアマネジメントとは

草津川跡地のエリアマネジメント*とは、ガーデンミュージアム*の実現に向けて、草津川跡地が長い年月をかけて発展し続けられるようにするため、市民、事業者、行政など多様な主体が一つの組織の中でつながり、役割分担、共同行動できる新しい仕組みを作るものです。持続可能なにぎわい空間創出を展開すると共に、広大な草津川跡地空間の管理・活用も一体的に行う必要があります、その一つとしてエリアマネジメントの仕組みづくりが求められます。

その仕組みの中で、市民が幅広く参加して活動を行う例には次のようなものが考えられます。



■活動プログラムの例

コミュニティガーデン*の実践

<ガーデン*づくりへの参加>

ガーデンミュージアムの具現化に向けて、空間を創ることから育てることまでの活動を、市民が主体となって組織化して取り組んでいきます。

<活動例>

- ・ガーデニング*講座への参加
- ・ガーデンデザイン（設計）への参加
- ・ガーデン育成、メンテナンスへの参加

市民活動プログラムの展開

<場の活用>

多目的に使える空間が多く生み出されることから、市民が主体となって様々な活動が展開され、人と人のつながりが生まれ、新たなにぎわいが創出されます。

<活動例>

- ・文化、芸術、自然学習活動への参加
- ・菜園、食育サークルへの参加
- ・防災訓練への参加

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

(5) 市民参加による活動に向けて

ガーデンミュージアム*での運営においては、利用者が運営に参画するための仕組みづくりが重要となります。特に、利用者を「ホスト（もてなす側）」と「ゲスト（利用する側）」の両面の可能性あるものと考え、これまでの屋外公共空間ではあまりみられなかった「ホスト」を生み出す新たな市民参加の仕組みを取り入れます。

①コミュニティによるプログラムの提供

草津市域を中心として幅広いエリアのコミュニティが、草津川跡地の各ゾーンで多様なプログラムを提供することで、新たな「潜在的な利用者」を呼び込むことにつながります。

【活動プログラムのイメージ例】

- ・自然学習活動
- ・アートイベント
- ・フリーマーケット*
- ・自主防災訓練 など

②周辺施設・機関・団体との連携

草津川跡地のコンセプトと関連の深い様々な機関と連携することで、草津川跡地は、多くの人がつながり活動する舞台となり、人々に愛される屋外公共空間へと成長していきます。

【連携する施設・機関・団体のイメージ例】

- ・地域に根ざした企業（CSR*活動など）
- ・地域団体、商工団体、障害者団体など
- ・周辺に存在する大学の研究室、教育機関
- ・周辺農家、JAなど

③「責任ある担い手」としてのコミュニティの育成

各コミュニティは草津川跡地での「責任ある担い手」としての活動ができるように、供用開始前からの関係づくりやコンセプトの共有を行ないます。

【コンセプト共有の手法例】

- ・活動している団体（NPO*など）へのヒアリング
- ・活動団体を対象としたワークショップ* など

④「コーディネーター」の育成

各コミュニティと草津川跡地の管理者との調整役を担うコーディネーター*を育成し、配置することが重要となります。

草津川跡地の整備が進められている間に、人材を発掘し、各コミュニティとの関係性を築き、ネットワーク*を構築しておくことが求められます。

【コーディネーターに求められる役割】

- ・課題発見能力や問題解決能力、調整能力
- ・市民活動に関わる既存の組織とのネットワーク など

注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

3.5 防災・都市環境デザイン

(1) 防災・都市環境デザインとは

阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「なんとしても人命を守る」という考え方を基本にすえてハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地は、広大で連続した空間であり、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。また、加えて周辺施設とのネットワーク*や太陽光発電などに代表される自然力*を活用することにより、災害時の自立した防災拠点になりうることも可能です。

さらに、日頃から多くの人々が良く利用する仕組みづくりと共に、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトを合わせることで、いざという災害時に日々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助*・共助*を可能とする空間づくり、活動づくりを防災・都市環境デザインで実現します。

(2) 防災・都市環境デザインのコンセプト

草津川跡地が備え持つ高い防災力を非日常に発揮できるよう、「日常の行動が活かせる防災コミュニティづくり」を進め、地域コミュニティ*の醸成と再生につなげます。また、「周辺地域防災施設とのネットワーク化」により、草津川を介した広域の防災ネットワークを構築します。さらに、「自然力を活かす都市活力・都市環境づくり」を進めることで、低炭素社会*や循環型社会の実現に寄与すると共に、災害時のライフライン*の断絶時などに自立できる環境づくりを目指します。

日常の行動が活かせる防災コミュニティづくり

- 日常のコミュニティ活動の醸成が災害時の共助の絆を深めます。学校、自治会などで防災教育、防災訓練などで地域防災力を高めるように努めます。
- 自助、共助の作動時に、公助*としての避難空間の整備（避難地、避難ルートの確保）が機能します。



周辺地域防災施設とのネットワーク化

- 地形・スペースそのものが視認性、認知度など強い防災力を持っています。地形をさらに活かすため、災害時に備えた施設や仕組みを備えます。
- 周辺地域の防災施設との連携を考慮し、適切なアクセス*路の整備、災害時の活動が可能なオープンスペース*、施設配置を行うことで、広域での防災ネットワークの構築に寄与します。



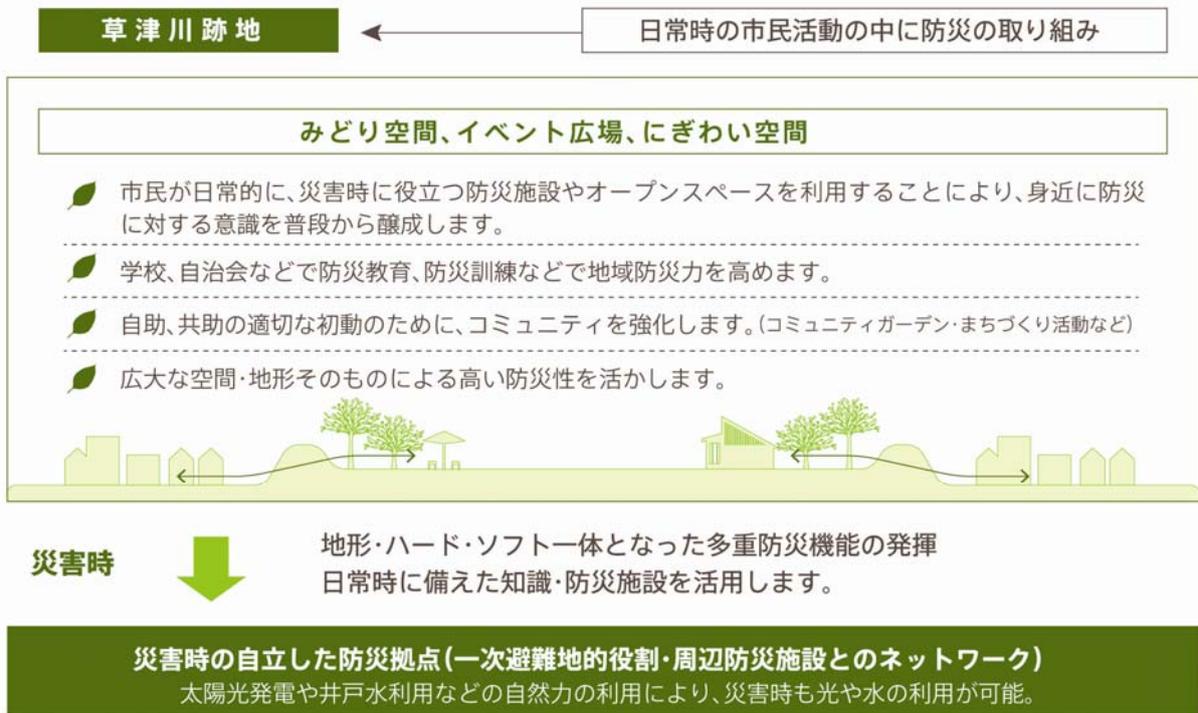
注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。

自然力を活かす都市活力・都市環境づくり

- 草津川跡地では、非常時に自然力*という資源を有効に活用し、市民の生活を支えます。
- 循環型社会の形成や都市活力の向上を目的に、自然の力を有効に活用する仕組みづくりを整備段階から構築すると共に、多様な主体による環境関連活動の支援・促進を行います。



防災・都市環境デザインの概念



阪神淡路大震災や東日本大震災における教訓から「なんとしても人命を守る」という考え方を基本にすえて、ハード・ソフト施策を総動員して防災性の高い空間づくりを目指します。

草津川跡地の広大で、連続した空間は、地形そのものが高い防災性を備えたハードといえます。

まず、日頃から多くの人が良く利用すると共に、日常時の市民活動の中に防災の取り組みというソフトが合わさることで、いざという災害時に、日々の習慣的な防災意識を思い起こし、自助*共助*を可能とする空間づくりを目指します。

※一次避難地*的役割とは、災害時において自宅などが危険な場合、主として最初に避難する場所としての機能を有することを指します。

(3) 防災機能の時間的な考え方

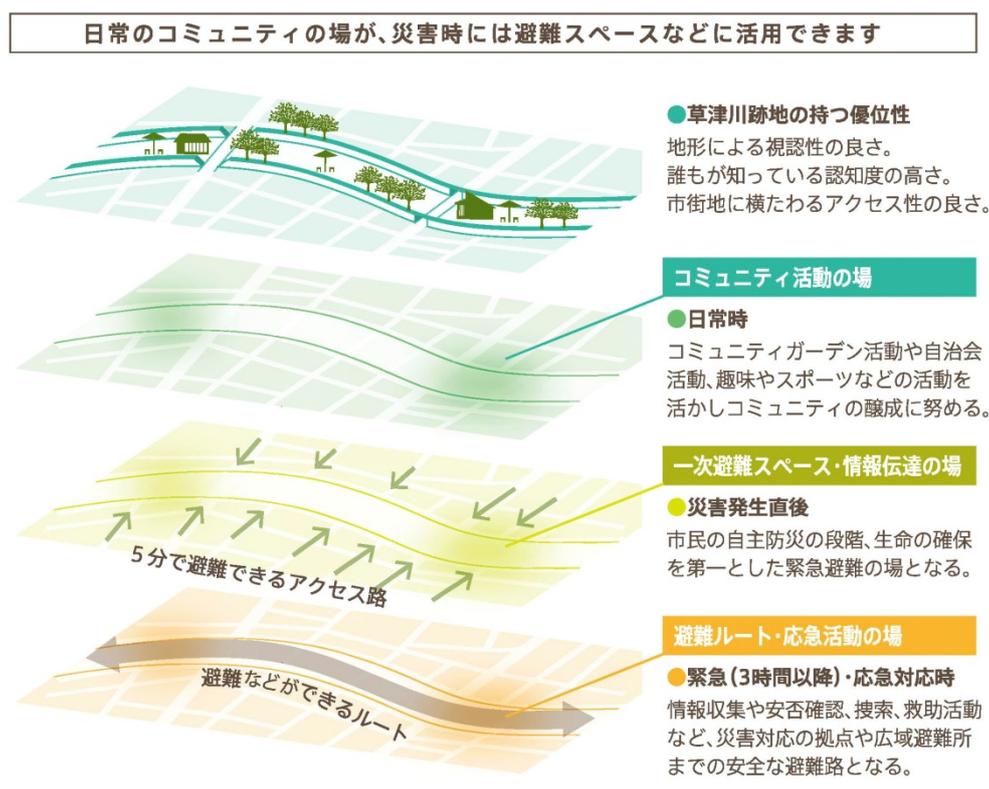
草津川跡地の有する貴重なオープンスペース*に対して、防災機能の時間的な考え方を導入します。草津川跡地では災害時に一次避難地*的機能を目指すことから、災害時の時間軸を考慮すると、災害発生直後から緊急（3時間以降）、そして応急、復旧・復興と進行するなかで概ね3日（72時間）程度の防災機能を有する必要があります。

<時系列に沿った防災活動の展開イメージ>

機能	段階	予防 (平常時の利用)					
		発災前	発災	直後 概ね3時間	緊急 概ね3日	応急	復旧・復興
①避難（一次的避難および広域避難）			●	●	●		
②災害の防止と軽減,および避難スペースの安全性の向上		●	●	●	●		
③情報の収集と伝達		●	●	●	●	●	●
④消防・救援、医療・救護活動の支援		●	●	●	●	●	
⑤避難および一次的避難生活の支援		●	●	●	●	●	
⑥防疫・清掃活動の支援					●	●	●
⑦復旧活動の支援						●	●
⑧各種輸送のための支援（③～⑦関連）				●	●	●	●

これを階層的に表現すると以下の通りとなります。日常時のコミュニティ活動の場が、災害発生直後には一次避難スペースや情報伝達の場となり、さらに緊急・応急時には、広域避難ルートや応急活動の場としての活用が図られることとなります。

草津川跡地における防災機能の時間軸の考え方



注：文中の*は「参考資料 用語解説」で用語の解説を記載しています。